

総合討論

司会 三好 章(愛知大学教授)

司会 それでは総合討論に入りたいと思います。今日は6人の先生方にお話しいただきましたが、まだ話し足りないことや、あるいは他の方々へのご質問もあるかと思います。まずはご自分のお話の中でどうしても補足しておきたいこと、あるいはさらに加えておきたいことに関しまして、2～3分前後でお1人ずつお話しいただき、その上でフロアからご質問をいただきたいと思います。予定といたしましては 17 時半までということになっておりますけれども、10 分ほど遅く始まっておりますので、10 分前後は延びるということでご了承いただければと思います。それでは藤井先生、よろしいでしょうか。

藤井 はい。話し足りないと思うものがかなりあったものですから、どれにしようかと迷ってるんですが。満蒙独立運動につきまして先ほどの講演ではお話ししました。辛亥革命が日中関係の転機になったということの理由として、この時期辛亥革命の混乱に乗じて日本側が満洲満蒙進出を一気に実現しようとして始まったのが満蒙独立運動で、これは民間の大陸浪人の、先ほど出ました川島浪速を中心として、陸軍参謀本部など軍部も協力して一旦は始められましたが、中央政府の中止命令によって挫折し、それから次の第3革命の時期、1916年の第2次満蒙独立運動によってまた復活します。しかしこれも抑えられて、そのあと少し内容は変わりますけれども満洲事変でこれが実現していくわけです。満蒙独立という基本的方向は同じです。私が言いたかったことは、満洲国建国 1932 年、帝政 1934 年と、こうやって満洲国の傀儡化が成立するという意味で、辛亥革命を契機としてそれまでの日本側の鬱積したと言いますか、表面化あまりしなかった満蒙独立運動が一気に噴き出したという意味

で、日本の中国侵略が実現に向かっていく大きな一歩として注目されるということを申したわけであります。私の言いたいことはこれだけにしまして、あとは今日お話しになった方への質問などを。

司会 ありがとうございます。では横山先生、孫文の相剋のお話をお願いします。

横山 今年は辛亥革命 100 周年ということでいろんなシンポジウムが行なわれているけれども、辛亥革命というのは非常に多面的な革命です。普通言われるのは民族主義。異民族(満洲族)の王朝であった者を倒し、漢民族の国家にしたというのが第1点ですね。第2点は今度は民主革命。孫文の言葉では民権革命でありますけれども、皇帝専制王朝体制を打倒して、アジア最初の共和国家を作ったという2つの側面が言われるわけです。

民族革命の中でも、漢民族と、中国を形成する今で言う少数民族(異民族)との関係をどうしていくかという意味での民族革命と、もう1つ今度は中国を侵略していた周辺の西欧帝国主義列強、および日本の侵略に対してどうやって民族を回復していくかということがあると思うんですね。

それから民主革命におきましては、先ほど言いましたように、どうやって憲法による立憲議会制を築いていくかという方向性の民主主義革命と、いやいや孫文が考えていたように、憲政は遠い先の夢であって当面は独裁でいくという民主独裁を民主主義の観点から議論できるか。マルクス主義の観点からは議論できるでしょうけど、民主主義の観点からは民主独裁なんて憲法無視になりますから考えられない。

といったように辛亥革命 100 周年と言っても、いろんな側面があって、どの側面から議論していくかによって辛亥革命の扱い方は非常に分かれていますと思いますね。藤井先生が本を出されたのも、基本的には民族主義的な側面から勉強されております。私は民主主義の側面に関心があるということがありまして、今年 100 周年ですけども、辛亥革命の研究はある意味においては非常に幅広いということをご理解いただければありがたいと思います。

司会 ありがとうございます。では薛化元先生、お願いいたします。

薛 今日このシンポジウムに参加させていただきまして本当に光栄でございます。フロアからも孫文とか、あるいは革命の再評価という言葉が取り交わされて非常に興奮しております。

中国の辛亥革命というのは清末の立憲運動の失敗から勃発したことであります。当時の人は清朝政府の立憲のスピードは非常に遅いということで革命運動に参加したのですが、民国が成立したにも関わらず、その立憲の歩みにはさらに時間がかかったのです。こういう歩みを確認すると、中国の歴史上で革命派、立憲派、改革派の意義について再評価することは、非常に学術的な価値があると考えております。この中から見ますと、孫文に対する再評価というのも非常に重要な課題になっております。

もう1つは近代化した憲法のことなんですが、それにはやはり人権を基本とする、人権を保護することが非常に重要であります。このことが中国で実現できれば、単に中国だけでなく人類史上にも非常に大きな出来事だと思います。

中国は世界で一番多くの人口を抱えて、東アジアの中でも非常に広い国土を持つ国ですから、その自由化と民主化が実現できるかどうかは、非常に意義を持つものであると考えております。人間の価値の高低は、近代ということを表す重要な条件であります、そういうことから言い

ますと、中国の近代はいったいどこから始まるのかということ、さらに深い意味で議論する必要があるんじゃないかなと思います。

辛亥革命 100 周年という時期に、こういうことについていろいろ議論できることは、非常に価値ある、あるいは意義あることだと思っております。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございます。それでは李廷江先生、よろしくお願いいたします。

李 2点ほど申し上げたいと思います。1つは辛亥革命と孫文に関する評価についてですが、時間幅を30年で見ると100年で見ると。最近では前後30年で辛亥革命の意義を見るべきだというような話もありまして、それは非常に重要な視点だと私は思っております。2つ目は日本に焦点を当てて考える時に、辛亥革命の中にある日本的な要素を重視しなければなりません。辛亥革命期の日中関係と現代との関連を考える時、私はまず辛亥革命にある日本的要素を考え、日中関係について考える時には、やっぱり両国の交流の実態を明らかにする努力が必要です。実証的に事実を確認する必要があるかと思います。そのような仕事を学者に実行しなければならない責務があります。そのためには美化と歪曲化は一切許されないのがわれわれの立場です。それから、やっぱり100年前のことを考える時にその多面性、時代性を当然視野に入れ、そしてわれわれはその本質と現象を見抜く能力を持たなければならない。結局今になってわれわれが継承していくには、狭い意味の国益を超越していくことがもっとも重要ではないか。そういうふうに思ったわけです。そこに現代的な意味と、現在の中国にとっての意味が生まれてくるのではないかと考えております。以上です。

司会 はい、ありがとうございます。では続きまして馬場先生。

馬場 具体的なことで2点話をさせていただきたいと思います。1つは先ほどの補足なんですけれども、8ページの最後のところをちょっとはしょって話したものですから。それは21箇条要求に対して先ほど、中国保全ということはある程度維持しつつこの時期に政治・経済的な権益拡大を図ったということ、そして日中同盟論(東亜同文会の小川平吉が代表的な人物)の論理の延長線に21箇条要求と同質なものが出てきているということを言いました。つまり一方で直前の満蒙独立運動には断固反対であると言って、再度中国領土の保全ということを確認したわけなんですけれども、その中国保全という前提のもとで政治・経済的な権益をより確保する。そういう意味ではどうも質的な転換が行なわれたのではないかと思ってるんですが、ただその21箇条要求の「支那」に載っている論文に対して内部で異論があるんですね。それは根津一の見解で、8ページの最後の部分なんですけれども、ちょっと時間をとって読ませていただきます。

14年の11月から2月にかけて3回にわたって、当時の加藤高明外務大臣に時局意見書を述べています。その内容は私はかなり注目すべきことを言ってると思うんですが、1つは第1次世界大戦でドイツから奪ったと言うか占領した青島に対して、「龍口上陸点より青島に至る兵站路を撤去し、以て日本の支那領土侵略に対する支那人の猜疑の念を解除した上で、条件付きで青島を含む膠州湾を中国に返還する」と。

ご存じのように19年の五四運動の時の主要な中国側の要求は、要するにベルサイユ条約で認められなかった青島を中国に返せということです。仮にこれが実現していれば、根津のようなことをやっておれば五四運動が起きたかどうかということも含めて、別の展開が日中間にあり得たのではないかと思います。それから遼東半島の関東州、少なくとも旅順を中国に返還し、さらにイギリスに勧めて威海衛を中国に返還させ、それらの代償として中国は満洲及び内蒙古を列国に開放するという譲歩案を提出し、こ

れでやれと言っている。実際にはこれは実現しません。しかし東亜同文会の内部で根津一がそういう政策を考えていたということは、注目すべきではないかと思います。そういう点で根津はこの直前に再確認された中国の領土保全という理念に、より忠実だったのではないかというふうに思います。

その他翟新さんが言ってること、これは私も賛成なんですけれども、「日貨排斥運動から受けた有形の損害はもとより、その根本となった対日悪感情という無形の損害が将来の両国関係に及ぶ悪影響を無視してはならないと警告した」。それはその通りです。どうしても私は歴史をやってますので、ある意味で結果は分かっているわけです。ある種の価値判断もあるわけですが、ただし私がたとえば東亜同文会の分析をやったことなんですけれども、東亜同文会もやはり非常に矛盾した構造があって、一方で中国の領土保全という、これはかなり国際主義的なんですね。他方で日本の権益拡大、これもやっぱりあって、それが矛盾対立しながらその時々に応じてどちらが強くなるか、あるいは会員の内部でも意見が分立してくる。

そのあたりが実は日中関係を考える時、辛亥革命を含めて、当時の中国保全という問題と、権益を拡大するという、その矛盾の中でどういうふうに動いたかということ、そこをやはり具体的に明らかにすべきではないでしょうか。結果から解釈してというのはちょっともう今の時代の歴史研究点では、物足りなく思います。今の段階でも日中関係はいろいろ言われていて、日本の若者の対中イメージは非常に良くない。たとえば21箇条だって、日本商品はボイコットをやられています。排日運動なんか大規模に起きています。そういう時に片一方で中国の領土保全という理念を示しつつ、同時に権益を確保したい。そういう団体がその時期どういう選択をしたか、政策を出したかということは、今の段階でも非常に現代的な意味を持ってるというふうに感じます。それが1点です。それからもう1点は、先

ほど大里先生がお出しになった、私の意見に対してですが、つまり私は東亜同文会を基本にして考えているわけですが、梁啓超、康有為の支援という問題と、それから清朝の改革に対する支援という問題が、時期によって分けられないんじゃないかとおっしゃったんですけど、私は大里先生のおっしゃってるようなことは、1898年から1900年ぐらいまでは言えるのかなと思ってんです。康有為、梁啓超とも関係あるし、清朝の劉坤一や張之洞とも関係あります。近衛は両方に関係あります。両方と付き合ってる。両方の改革に対して支援をしている。その点は1900年ぐらいまでは言えるんじゃないかなというふうに思っています。1901年以後になると重点はやっぱり清朝のことかなというのが私の見解です。1900年までは大里先生のおっしゃってるのと変わらないです。

司会 ありがとうございます。では最後に武井さん。

武井 今回私の報告は資料紹介のような性格が強くなっておりますので、改めて大きく付け加えるということはないんですけど、山田兄弟についてはレジメの参考文献で挙げておきましたが、たとえば結束博治さんとか保阪正康さんなど、そして馬場先生もご論文でお書きになっていますが、そうした方々によってある程度明らかにされてきています。しかし全てそれで判明したということではなくて、やはり細かく見ていくと、行動面とか意識の面などで分からない部分も間々あるように感じます。

東大の川島真先生という方が、先頃『中国研究月報』という雑誌の最後にお書きになっていましたが、孫文の協力者になっていった日本人を考える場合に、参加した動機は何かという点を考えることも大事ではないかというようなご指摘をされていました。私の今回のご報告では、そのような点も意識して山田兄弟の生い立ちから見ていこうと一方で考えていました。ただメイン

としては資料紹介の形になったわけですが、そうした川島先生のご指摘、そして今日フロアに見えた三好先生から多くのご指摘をいただきました。そうしたご指摘を踏まえた上で、今後いろいろ研究を考えていく必要を私感じた次第です。以上です。

司会 ありがとうございます。時間が押せ押せになって大変失礼ですが、それでは今日の報告者のあいだでそれぞれご質問があるかと思います。藤井先生何かおありになりますか。お願いいたします。

藤井 武井先生のお話の中で幾つかあるんですが、事実問題として、梅屋庄吉評価が最近高まっております。本も出ました。誤りがはっきり言っているんですね。1兆円か2兆円を援助したという説があの本の中に書いてあります。これについては最近、狭間直樹さんが正面から「荒唐無稽な額である」として毎日新聞の大阪版に何回も寄稿して、今議論が起こっております。1兆円か2兆円という莫大な援助をしたという説については、私も非常に疑問です。あまりにも誇張であって、1桁か2桁は少ないんじゃないかと思っています。その本は『革命をプロデュースした日本人』という表題で小坂文乃さん、それからさかのぼって車田譲治氏の両人が書いております。私は新聞で小坂氏の本の書評なんかで批判をしました。「小説・梅屋庄吉である」と書いている車田氏の本を引用してるんですね。幾つか誤りがあるので私が指摘したら、著者からねじこまれました。何でそんな些細なことを新聞に書くんだ、売れ行きが落ちると、とんでもない逆ねじをくらわれました。些細なことじゃないんです。その本の中では、孫文が1913年8月に亡命してからずっと梅屋庄吉の家に匿われたということとんでもないことが書いてあります。そうじゃありません。赤坂霊南坂の頭山満の隣家に匿われて2年住んだんです。

あと簡単に申しますと、孫文が客家であるとい

う説、これは間違いです。非常にそういう間違っ
た説が流布されているんです。私が孫文の故郷
の生家へ行った時にも、それから広東省の研究
者の中にもそのような話がありました。「教養の
無い人がそういうことを言うんだ」と。ちゃんとし
た証拠もあります。孫文の書いた『Kidnapped in
London』。孫文がイギリス大使館に拉致監禁さ
れたのは 96 年 10 月でした。その 13 日間の体
験談を孫文が英文で発表している。それが一躍
孫文の名前を有名にしたんですね。この中に書
いています。「自分の妹が纏足させられてるの
に反対した。そうしたら母親は、纏足しなければ
客家と間違えられて将来困る。だから客家と見ら
れないように纏足するんだと言った。孫文があまり
反対するので纏足をやめたと思っていたら、
目の前でやらないで、他の人のところへ連れて
いって纏足した」と、孫文自身が書いております。
これがはっきりした証拠ですね。

そういう流説、誤った説がどこからか流布して、
客家出身者の名声を高めろという形で広がり、
孫文、軒並み中国系の人達の客家説が広がっ
ております。これははっきりした誤りです。中国
ではそういう論文が出ています。「客家であら
ず」という。これが 1 つ。たくさんありますが簡
単に言いますと、さっきの洪兆麟の処刑説です
ね。これは上村希美雄さんの『宮崎兄弟伝』から
取られたんですか。

武井 そうですね、上村さんと、あと保坂正康さん、
結束博治さんあたりの記述を中心にしました。

藤井 ああそうですか。上村希美雄さんは自ら
処刑されたと言われてるところへ足を運んで、聞
き取りをやったと言いますね。当時の生き残りを
訪ねて。一番正確じゃないかと思いますね、上
村さんの記事は。

あと、保全が權益拡大かという馬場さんの報告
に対して、当時、支那(中国)保全という言葉が
流行しましたね。しかし一方では權益拡大、国
益増大という、これは同じ根っこから出てるんじ
ゃないかという気がするんですね。つまり保全と

いうのは対外的な、列国に対する保全をしてる
んだと。しかし本当は權益拡大したいんだという、
繋がってるような気がしてならないんですね。従
って中国保全という言葉自体に非常に私は疑問
を感じるんです。

それから山田純三郎については、森格の伝記
の中で山田純三郎談として、「第 2 革命の最中
に孫文は、日本からの 2 個師団と 2,000 万円の
援助と引き換えに、満洲割譲を約束した」という
記事が載ったんです。これが流布されて、引用
する人が今でも多いんですが、はっきりした間
違いなんですね。今日私が触れました 1912 年
の満洲租借問題ですが、この時山田純三郎が
立ち会っています。滔天と山田純三郎が森格に
証人として付いていった。その時の記憶を間違
って後年書いたのか、あるいは森格が自分の立
場を考えて意図的に変えたのか分かりませんが、
いずれにしてもこれは真っ赤な嘘なんですね。
山田純三郎の回顧談として載っている約 10 行
ぐらいの記事です。私も前に騙されてこれを引
用したことがありました。しかし満洲租借問題が
はっきりと事実と分かって、2 個師団の日本から
の武器弾薬の援助と、2,000 万円のお金と引き
換えに満洲買収案に賛成したと、そういう衝撃
的な見出しで載ったんですね。ということで、こ
れは別に武井さんがこのように発表したわけじ
ゃないんですけれども、山田純三郎についても
しまとめられる時には、この点をご注意頂きたい。
何かの間違いか意図的なものか分かりませんけ
れども、いずれにしてもおかしいんですね。久
保田文次さんもこれを真っ向から否定していま
す。といったことで、武井さんのご発言に関して
いろいろと言いましたが、時間の関係でこの辺
にしておきます。

司会 はい。それではご質問ありましたけれども、
武井先生はちょっと大ごとになりそうですので、
馬場先生に対して「保全が權益拡大といっても、
同根ではないか」というご質問ですが、いかがで
しょうか。

馬場 基本的には関連していると思います。領土保全と権益拡大とが。ただ藤井先生は「外国に対して日本は支那保全というふうに言ってる」といわれるが、私はむしろ外国に対して中国の領土を保全しろと言っていて、スポッと抜けてるのは自国のことではないか。いつも気になってるのは、たとえば台湾の植民地化、それを前提にしている、この段階で。東亜同文会は朝鮮半島についてもそうです。同文会ができたあとに朝鮮半島の植民地化がされる。外国に対して黄色人種として中国の領土保全なんだ、欧米諸国から領土を分割されるのは反対なんだといいながら、自国のことについてやっぱり欠けてるから、たとえば先ほどの「21 箇条要求」の青島、こういうものの利権を継承すべきだということに引きつけられちゃうと思ってます。要するに関連しているというのは私は賛成です。ただしそれは欧米諸国に対して中国領土を保全すべきであって、そのために日中両国黄色人種は連携すべきだといって、日本内部の問題に対しては、どうもやっぱり欠けてる。だからそれはやっぱりこの時代は難しいのかな、そういう認識をするのは。それこそマルクス主義的な理念が出てこない。ただしそれはまた話は別でしょうから。

司会 ありがとうございます。武井さんいかがですか。

武井 藤井先生、貴重なご指摘ありがとうございます。私も孫文が客家であったとちょっと思い込んでいまして、それが誤りだと。教養の無い人がそう言ってるというご指摘でしたが、それはまさに私のことであると今反省しながらお話を伺っていた次第です。

藤井 中国人のあいだでそういうに言われているということです。その人が断言しました。

武井 ああ。失礼しました。しかし私も不勉強なところがありますので、先生からご指摘いただいたところはこれから勉強してまいりたいと思います。ただこの梅屋庄吉の評価について言います

と、最近ここ数年、梅屋庄吉がけっこう取り上げられてきてまして、1兆円から2兆円寄付したと。それに対して狭間先生とか藤井先生が批判をされているというお話ですが、実は先ほど申した川島真先生が、孫文の協力者になっていった日本人を考える場合に、金額で貢献の度合いを測るのではなく、先ほども申したように革命に参加した動機は何かということを考えなくちゃいけないということを書いております。

革命をプロデュースしたというような言説が流布しているということを批判するような文言がそのご論文の最初に書いてあったんですが、おそらくそれはある種の宣伝に対する批判的意味合いを込めたものであるというふうに私この場であらためて思いました。

確かに梅屋が熱心に孫文を支援したことは間違いないと思いますが、批判的に捉えていく必要もあるかと思いました。どれだけ貢献したかという点については、ちょっと冷静に見ていく必要があるというふうにご指摘頂いて改めて思った次第です。

解答にはちょっととなっておりますが以上でございます。

司会 ありがとうございます。その他ステージの方でございますでしょうか。時間も押してますので、よろしければフロアからご質問をお受けしたいんですけども。はい、お願いいたします。

質問者 さっきの質問からちょっと外れるんですけど、日中戦争時代、国民党・中華民国のリーダーは誰だったんですか。袁世凱はいつ亡くなったんですか。失脚したんですか。それからあと、中国共産党が台頭しますよね。毛沢東さんとか江青さんとか周恩来さんの民族は漢民族だったんでしょうか。それから袁世凱はやっぱり漢民族ですか。それとも満洲族ですか。民族をちょっとお願いしたいんですけど。

司会 はい。司会の独断になりますけれども、袁世凱は漢民族ですし、毛沢東も江青も漢民族で

す。ただし日中戦争期は辛亥革命からさらに 30 年、40 年あとの話で、力関係とか中国国内の状況もずいぶん変わっております。今の段階でそれを取り上げるとずれてしまうので、申し訳ないですけれども。まあ孫文の弟子ということになると毛沢東も蒋介石も自分らのほうが直系でしたということをお互いに言い張っております。それは別に師弟関係があるわけじゃないんですが、思想的に自分のほうが直系だということです。蒋介石は孫文と一緒に列車に乗ってるという架空の絵がかかっていたりしますので、どこまで本当かよく分からないんですが。その当時、日中戦争時の国民党のリーダーは蒋介石です。

質問者 袁世凱はいつ亡くなったんですか。

司会 1916 年です。ではあとひとつ方。

質問者 東亜同文会と中国との関係については李廷江先生、それから馬場先生、捉える人物と時期が違うんですが、微妙にニュアンスが違っていたんですね。それとは別に藤井先生の話聞いても多少評価の仕方と言うか見方が微妙にそのあたりニュアンスが違うように聞こえます。お三方に答えていただきたいことは、要するに東亜同文会は当時日本の政府、もしくは外交政策に対してどれくらいの影響力があったのか。東亜同文会と中国との関係、時期は別にして、いったいどのような評価をすればいいのか、率直なご意見を伺いたいと思います。

もう1つ、横山先生に、孫文と袁世凱が同罪というあたりがあまりにも刺激的で、ちょっと意外だったんですが、まあ刺激的なところはそれでいいんですけれども、ただ革命党あるいは革命派の中での路線、論争と言いますか場合によっては路線闘争と、革命派以外、要するに袁世凱は前の勢力と手を組んでいるわけで、だから同じロシア革命でもトロツキーとレーニンの路線の違いはあったわけですね。同格と言っていいかどうかというあたりをもう少し説明していただけると幸いです。

司会 ありがとうございます。時間がありませんので申し訳ないんですが、藤井先生から手短にお答えください。

藤井 あとのほうの問題についてですね、先生の同罪という刺激的な発言について、私は全く正反対です。同列に論ずるところかこれは雲泥の差です、政治家として。理由はまず政治権力者としての目標、将来の建国のプラン、これを孫文ははっきり持っておりました。完全ではありません、いろいろ矛盾のある三民主義を始めいろんな言説があります。しかし中国を良くしようと、貧しい人達を豊かにしようと、こういう目的をはっきりと持っております。そのための準備としていろいろ考えたわけですね。袁世凱にそれがあったか。私は疑問に思います。もちろん実業振興をやったりしています。しかし袁世凱にとってはまず権力の座です。将来大総統を獲得するためにあらゆる手段を尽くします。それには卑劣な手段も用いました。暗殺を多用しました。孫文は暗殺に反対でした。汪兆銘が暗殺をやろうと言うのを抑えようとした。しかし汪兆銘は暗殺に走りました。

つまり私の言いたいのは、権力の座を獲得するためにあらゆる手段を労して一步一步重ねていった袁世凱と、自分の権力の座でなく目標である清朝を廃止し共和制を樹立するという基本的な目標に向かって、挫折にめげなかった孫文。辛亥革命の成功後は軍閥の横暴、人権無視、まあ孫文についても人権無視ということはある程度は言えるかもしれませんが、しかし人権無視の次元が遥かに違います。孫文は必ずしも充分に自分の考え方を述べていないと思いますが、それは別にしても辛亥革命までの孫文の百折不撓と言いますか、革命のために捧げた情熱、革命成功後の軍閥との戦い、帝国主義の不平等条約撤廃論にかけた強い熱意、死ぬ間際までそういった信念を曲げなかった。最後まで「革命未だ成らず」で権力を獲得できませんでした。中国の北京政府を抑えることはできませんでし

た。

一方で袁世凱は北京政府の頂点に上りました。大總統の地位を獲得しました、死ぬまで。しかし政治家の評価というのは権力の獲得が実現したかどうかじゃなくて、どういった政治家としての理想なり目標のプランを持って、そのために献身したか。孫文は権勢に非常に恬淡として、蓄財は行いませんでした。死んだ時に残ったのは、華僑から寄贈された上海の家と、書籍、衣類だけでした。宋慶齡に自分の財産を贈ると言って、残った国民党同志たちは苦笑したそうです。挙げればきりがありませんが、そういった意味で「同罪」というのは、これは言い過ぎだと思います。

司会 はい、ありがとうございました。その問題がちょっとあるんですが、横山先生、簡単に補足をしていただいて、続いて馬場先生にお願いしたいと思います。

横山 藤井先生は私の先生です。私が大学院時代から論文をずっと読んでいただきまして、大先生からこのように叱られると、弟子としては困っちゃいますけれども。

私が言いたかったことは、あらゆることを含めて同罪だと言ってるわけではなくて、民主主義（デモクラシー）という切り口で議論するならば、これは同罪であると。別に人間性において議論してるわけでもないし、政治家・思想家としてあるべき姿で議論してるわけでもない。やっぱり議論する場合には限定をしなくちゃいけない。今回の場合は議会制民主主義という理想を宋教仁達が目指した。辛亥革命の出発はそこであったにも関わらず、その路線が挫折して、辛亥革命は終わった。その終わらせた責任者が2人いる。1人が袁世凱であり、1人が孫文である。その意味において、民主主義の発展から言えば同罪であるということです。今藤井先生が人間性において孫文と袁世凱の違いを指摘されました。孫文は革命の夢があり、袁世凱には何もな

かったと。私は袁世凱も立派な政治プログラムを持っていたと思いますが、そこまでやるとまたきりがないので、終わりにしたいと思います。

司会 ありがとうございます。藤井先生のご反論も当然おありかと思いますが、それはあとの機会です。李廷江先生、馬場先生、東亜同文会の日本の外交政策への影響という話がありましたけど…。

馬場 辛亥革命直後に東亜同文会自ら、確か国際協力団体という言い方をしています。それは要するに外務省とはやっぱり違う組織であって、外務省のやれないこと、あるいはやらないことをやると。先ほどこちよっと申し上げたように辛亥革命直後に各地に調査員を派遣して情報収集をしています。これなどは外務省は外務省の組織でやったと思うんですけど、それとは別にやっている。そういう国際協力団体として、外務省とある種一線を画して動くというところに、東亜同文会が自分達の組織のアイデンティティーみたいなものを感じているように思います。

もちろん政策の提言をします。最後に申し上げたような、たとえば加藤高明に、根津一が 21 箇条条約の内容に関連して提言してるわけですけど、どうも何かそういう政策は出すんだけど、そのあとはあまり実現してない。それよりも一番そういう政策みたいで活かされてるのが、たとえば辛亥革命の直後に根津は 14 箇条を出すんですね。そのうちの 12 箇条は実は東亜同文書院がやることだと言ってるんですけども。たとえば調査をやるとか。実際にやってるものをそのままその時点でより大規模にやるという内容ですけど。どうもその東亜同文書院を通じての活動、そのために外務省にお金を要求して、そしてそれにお金と人が付いてくる。そういう意味での政策は実現してるんですけど、中国の政治に介在して政策提言をしてというのは、どうも私の見てる限りではあまり実現していない。東亜同文会はやっぱ当時の人ですから政策提言は非

常に自分達の組織の存亡を賭けるみたいな、すごく気負った意識があるんですけど、結果的にあまり実現していない。むしろ外務省と別々の組織で、外務省のやらないこと、やれないことをやるというところに自分達の組織の位置づけみたいなことを考えていた。そちらのほうを重視したほうがいいんじゃないかという感じを私は持っています。

司会 ありがとうございます。まだまだ議論は続きそうなんですけれども、このあとよろしければ、18 時(時間はあまりありませんが)からリュミエールで懇親会がごさいます。そちらの席でお続けいただければと思います。本日は朝から晩までお付き合いいただきましてありがとうございました。最後にセンター長からご挨拶がごさいますが、討論を締めるに当たりまして、センターでの討論会ではごさいますが、今後の方向性として1つは単なる顕彰に留まらない。同文書院はこういうことやああいうことをやって、良かった良かったという顕彰に留まらない研究が望まれるでありましょうし、またそれができるということを、今日の個別の報告および討論会は示してくれたんじゃないかなと思っております。どうもありがとうございました。では最後にセンター長の馬場からご挨拶がごさいます。

馬場 どうも本日は朝早くから夜遅くまで、ご参集いただきまして本当にありがとうございます。このシンポジウムを計画した時に、実は東京や神戸で大規模なシンポジウムをやると聞いておりまして、どうせやるならわれわれとして独自性のあるものをということを考えました。それで東亜同文会と東亜同文書院で1つ柱を立てて、それからもう1つはやっぱり孫文ですね。最近ちょっと何か辛亥革命と言うと孫文が後景に退いたような雰囲気があるもんですから、これは東京のシンポジウム、神戸のシンポジウムでもそういう感じがします。

従いまして私こういう言い方をしてたんですが、

正規戦をやったら東京や神戸にとっても勝てない。われわれはゲリラ戦をやろう。少数の人間で、しかもわれわれとしての独自性を出したい、ということを考えてやりました。今日最初から藤井先生が大変気合いが入って、と言っては失礼かもしれませんが、それが何か今日のシンポジウムの全体の基調を決めたのかなというふうに思いました。それぞれ個々の討論についても、往々にして討論が盛り上がらないということがよくあるんですけれども、数は少なくとも、非常に今後に広がるご提案、あるいはご質問をいただいたというふうに思います。これは私だけの、と言うとセンター長の手前味噌になってしまいますが、おそらく会場の方にもある部分共感していただけるかと思います。

今回こういう形でやりましたけれども、私共東亜同文書院大学記念センターとしては、これからも別のテーマでまたやっていきたいと思えます。今日いらっしゃいました方、ぜひ今後ともよろしく私共の催しにご協力いただければ幸いです。以上をもちまして私の簡単なご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございます。以上をもちまして終わらせていただきます。司会が風邪の病み上がりで、こんな声で失礼いたしました。それに加えて手際の悪さでずるずると時間が延びてしまったことをお詫び申し上げます。では申し訳ございませんが 18 時からリュミエールで懇親会がごさいますので、お時間があってお手すきの方、また今日ご参加の方はぜひともそちらへ足をお運びください。どうもありがとうございました。

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
国際シンポジウム

辛亥革命・孫文・東亜同文会

日時 2011年 11月12日 土 10時30分～17時30分

場所

愛知大学 豊橋校舎記念会館3階 小講堂

当記念センターは東亜同文書院をめぐる国際シンポジウムを2007年、2008年に行ってきた。
辛亥革命百周年にあたる今年は、「辛亥革命・孫文・東亜同文会」についての国際シンポジウムを
実施し、それぞれの歴史的意義と現代的な意味を多面的に検討することにした。

1 藤井昇三氏（電気通信大学名誉教授）
「辛亥革命と孫文 一日中関係の転機」

2 横山宏章氏（北九州市立大学教授）
「辛亥革命の夢と孫文の相剋」

休憩：東亜同文書院大学記念センター公開 12:20～13:10

3 薛化元氏（政治大学教授）
「民国の樹立から民国の憲政へ
—中華民国憲政発展の考察—」

4 李廷江氏（中央大学教授）
「21世紀における近衛篤磨の思想的遺産」

5 馬場毅氏（愛知大学教授）
「辛亥革命と東亜同文会」

6 武井義和氏（愛知大学非常勤講師）
「孫文に協力した山田良政・純三郎兄弟の活動について
—惠州起義から第三革命までを中心に—」

7 総合討論



山田純三郎（左）と孫文



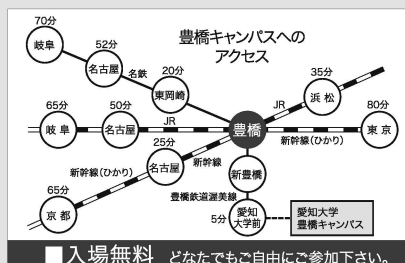
近衛篤磨



山田良政



孫文が山田純三郎に贈った肖像写真



■入場無料 どなたでもご自由にご参加下さい。

当日は隣接する「愛知大学記念館」の中の「東亜同文書院大学記念センター展示室」を公開いたします。ぜひ、ご覧ください。

■主催：愛知大学東亜同文書院大学記念センター
■後援：中日新聞社、(財)豊山会、愛知大学同窓会

お問合せ

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
TEL(0532)47-4139 FAX(0532)47-4196
E-mail:tschien@ml.aichi-u.ac.jp